

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和元年11月 9日
(84号)



[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 学塾・中之島事務局

人間学塾
第86講

「運命を生きる」

執行早舟先生



■ 運命とは何か

人生とは、自分がどう決断したか、それだけです。断れども決断が続けば、素晴らしい人生になります。初心をいかに維持できるかが決め手となります。今日のこの出会いを初心の日としていただきたいと思います。

時間には、物理学の物質時間（絶対時間）の他に、生命時間があります。これはカゲロウは七日間だと象は六〇年だとかいわれている生命に与えられた時間で、種に与えられています。ところが人間だけはこの時間以外に「運命を生きる」のです。この運命に生きるということが現代では忘れられています。吉田松陰は二九歳で死にました。これを早死にと捉えてしまうと、運命はわからなくなります。要はその人間が自分に与えられた運命を生きたか、生きないかであり、それが人間にとって一番尊い生命だと思っています。絶対時間でもなく生命時間でずらない時間を我々人間は生きるのです。

運命とは何か。運命とは宇宙から与えられたエネルギーです。運命というのは、垂直（縦）を志向しています。横は一切関係ない。縦はまず親・先祖・民族・人類・地球・宇宙そして神に到達します。運命は横を見ないで、縦に邁進していくほどに脈動するのですが、横を見れば見るほど運命は去っていきます。現代は物質文明なので、殆どの人は物質時間に支配されているでしょう。今日を契機に、自分独特の運命に入っていたきたい。運命は自分固有であり、その人だけのもので参考値はいっさいない。どう決断していくかだけです。

どんな学問も自分と交錯しないと意味はありません

ん。交錯がどうということかは、運命に体当たりしない限り解りません。運命が最も嫌うのは水平化一般論、流行、マスコミ等々です。生命はその運命を生き切るために存在しており、肉体は乗り物に過ぎません。私は子どもの頃から武士道が好きで、いつでも命を投捨てる覚悟があります。運命は体内の奥深くの魂の中に入ってきますから、肉体に関わっておれば、最高でも生命時間しか生きられない。昔の人は五十代六十代で死ぬ人が多かったものです。今は平均寿命は長くなりましたが、昔の人の方がずっと人生は濃いと思います。

■ 運命の美しさ

運命への愛とは、自己の運命を信ずることです。自分に与えられた運命を愛すること、これは好き嫌いではないです。自分自身を振り返り言えることは、不幸になってもいいと思えない限り、人生は愛せません。死も不幸も許容することです。良くなりた、成功したいと思っていると、好みの方へしか向かえない。実は好みはたいいてい運命ではないのです。運命を發動させるためには、まず宿命（時代・民族・家系・環境・今日の過去の過去）を全て認めることです。悪い顔に生まれたのならそれを楽しむのが運命です。宿命という変えられないものを愛さない限り、次の変えられるものを良い形にしていけない。与えられたものは自分の人生に必要であり、なんで与えられたのか考えることが運命の始まりです。「認識することによって存在はある（バークレー）」の言葉のように、自分の宿命を認識することで、



初めて自分の存在の根本である運命が浮き上がってくるのです。宿命のうち一つでも嫌なことが有る人は、運命は生涯発動しません。

また、運命を掴むためには失敗、蔑みを度外視しなければなりません。そこから、自己固有の運命に対する本当の愛が生まれる。褒められようとするのは水平志向で自己固有ではないのです。自分の運命を生きたらいつ死んでもよいと思えてきます。『葉隠』のなかでも特に根本としているのは「死に狂い」（「体当たり」）・「忍ぶ恋」（「到達不能の憧れに向かう生き方」）・「未完」（「勇気」）。未完という勇気とは、未完成でいいと思うこと。犬死にできないと思えるかどうかは未完の思想です。

私は『葉隠』の実践と研究を自己の運命と考え、目的はそれだけで、結果も他人の理解も求めていない。運命は自己固有ですから、他人の評価・理解を求める人が一番拙めません。

運命の美しさとは、体当たりの結論です。織田信長もまた運命を生きた人の代表でもあります。本能寺で死ぬときに「是非に及ばず」と言っている。これは「理屈は何もない、良いも悪いもない」ということ。不断の体当たりは確かに苦悩の人生を生み出します。しかしそれは、自己に与えられた固有の運命の中に潜む生命の真の美しさを教えてくれるのです。失敗や不幸の中にこそその美しさがあります。私自身一番運命が美しかった時期は不幸のどん底の時期です。好きな言葉に「お前の知らぬものに到達するために、お前の知らぬ道を行かねばならぬ」（聖デ・ラ・クルス）があります。自分がどんなものになるか解らないままに道を歩むのは楽しいものです。真の独立自尊です。運命とは、自己のものであり自己のものではない。民族の運命が個性の中心を創っているのです。日本人なら日本人らしくあることは大切であり、民族を学び愛国心を持つことで、宇宙的使命も解ってくるのです。

（抄録 中川千都子）

《感動語録》 (塾生抄録)

- ・「宿命とは、自己固有の運命のうちすでに過ぎ去ってしまい、もう変えることの出来ぬもの」と言われましたが、森信三先生の「逆境は神の恩寵的試練なり」とのお言葉が浮かんできました。更に「宿命もその自覚に徹すれば、そのまま恩寵に転ずる」との教えもあり、まずはここを認めなければ始まらないと学びました。
- ・今日起きたことが、自分の運命であると思う決断をする、自分の生き方が変わる。
- ・自分の運命をスライドして読書する。
- ・分からない人生ほど楽しいものはない。どうなるか分からないから面白い。
- ・不幸のどん底の時期が一番美しい。
- ・自分の運命を愛する。自分の人生を生きること。一番の親孝行は、子どもが幸せになること。
- ・読書は「答えを得るため」ではなく「問を見いだす」ために読む。
- ・不幸の人生を覚悟しなければ、貫徹できない。
- ・運命は縦の関係。水平(横)を見るほど、運命は去って行く。
- ・初心は尊い!!どのくらい貫けるかで人生が決まる。
- ・運命の女神が、勇気にあこがれる。
- ・自分の人生を生きるということは、自分の大切な人にも勘当されるということ。

- ・不幸になりたくないと思う人は、自己の人生を生きられない。
- ・人からの評価を気にせずに、失敗と他者からの蔑みを度外視せよ。
- ・垂直が自分を産みだす根源である。水平に生きると、運命はみえない。
- ・「過去」を「研究」とすると未来が分かってくる。
- ・与えられた宿命を受け入れて体当たりで生きると運命が開かれる。失敗や周りの蔑みを恐れずに生命かけて取りくむこと。
- ・運命に体当たり。
- ・親心とは、祈りである。
- ・楽しいことを求めると運命をつかめない。自己固有の運命を貫徹するには死の覚悟が必要。
- ・自分の勇気を信じる。
- ・読書とは、過去に生きた人との魂と出逢えること。
- ・宿命をすべて受け入れ、すべてのことに体当たりで生きる。体当たりの生き方には不幸もあるが、覚悟して生きる。
- ・運命とは自己のものであり、決まっていた運命を知るためには、民族の歴史を知ること、歴史を知るには読書をする、歴史上共感する人物・過去の魂を知ることが出来る。森信三先生の教えを、寺田一清先生が解りやすく説いてくださっている『全一学』を、再度死ぬほど読まねばならないと思います。

《大悟徹底》

寺田一清先生寄稿録

「節から芽が出る」



若き日によくお聴きした格言に、「通さぬは通すがための道普請」という一句があります。よく道路工事のため、

一方通行もしくは通行止めの標識が立っています。

これは道路の補修工事や新規拡張のための工事中で、通行を容易にするため一定期間の辛抱をしてくださいとのことです。

いまひとつは「竹に節あり節から芽が出る 人生またしかり」という一句です。これもあれも人生の節、すなわち逆境にあたるコトバです。

森信三先生も「逆境に処する態度」について数多くのコトバを残してくださっておりますが、そのもつとも有名なコトバとしては、

○ 逆境は神の恩寵的試練なり

の一語に尽きます。森信三先生も生後二歳にして両親が不縁のもと母は郷里に帰られ、三歳にして縁もゆかりもない小作人の農家にもらわれて生育せられました。これをはじめとして幾多の苦難を味わっておりますが、いまひとつ大きな逆境的試練は、四三歳にして満州国新京の建国大学教授に就任せられ、そこで終戦後の苦難を異国にてつづさに体験せられ、奉天市内の廃屋にて零下三〇度にて凍餓死まで覚悟せざるを得ない状況まで迫られました。この深刻な体験の後やつと帰国せられましたが、復員後の生活もただならぬものがありました。先生晩年のある時、私は先生に野暮な質問をいたしました。「恩師西晋一郎先生の強いお勧めがなかったら、異国の地の辛酸痛苦を味わわなくてはなんだではなかったでしょう」と後悔なされたでありまして申し上げたところ「あなたともあろう者が何を言いますか。後悔するとは、これっぽっちも考えたことがありませんよ」と厳しい表情で仰言られました。正に絶対肯定即絶対最善を説かれる先生に対して愚問を發したものでした。

思えば「信」とは全肯定・全受容・全感謝であると改めて教えられた次第でした。

《感動語録》 (聴講生抄録)

- ・ 民族の魂を知り、自分の運命にスライドさせる。
- ・ 自分の運命を全うするには、死を覚悟する。
- ・ さげすまれると、運命が力づく。
- ・ 愛は苦悩・悲痛の中からしか生まれない。
- ・ 自分だけの人生を生きて、自分だけの死を選ぶ。
- ・ 死にもぐるいで仕事をすると自分独自の人生がある。
- ・ 「体当たり」すると運命は開ける。
- ・ 許しが最初に来たら、文明は滅びる。
- ・ しくじることが大切。不幸や失敗が大切。
- ・ 今日が運命の日と思えばそうなる。
- ・ 不幸を受け入れる覚悟が大事。
- ・ 生命の時間と運命の時間は違う。
- ・ 運命は水平を嫌う。
- ・ 唯一固有の自己を知る。
- ・ 不幸の覚悟を決めれば、その生き方は、神話となる。
- ・ 欲望から必ず抜け出すこと。

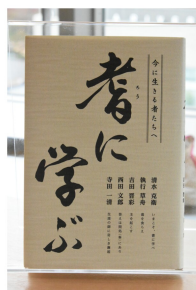


- ・ 自分に与えられたすべてが素晴らしい、なぜこれを与えられているかを常に考えること。
- ・ 親孝行＝先祖を敬う。
- ・ 体当たりの生き方は、不幸の仁世を覚悟しなければ貫徹できない。
- ・ 勇気こそが自己を信ずる精神を生む。
- ・ 宿命をすべて認め、自分の中に落とし込む。
- ・ 助けることが出来ると思っているのは、傲慢である。
- ・ 失敗と、他者からの蔑身を度外視しなければ、運命は掴めない。



- ・ 優しさは運命的である、運命は過酷なものである。

- ・ 「親心」現代の人々は子どもを何とかできると考えている＝傲慢だ。自分の人生を受け入れ感謝できるのは、両親が「親心」を持って過ごしてくれたからと思えて、沁みました。
- ・ 読書は答えを求めるものでなく、問を見いだすために本を読む。
- ・ 不幸でも貧乏でも良い、自分だけの人生を生き、自分だけの死を覚悟する。
- ・ 読書によって何かを得ようとするのではなく、書いた人の魂に触れるために読書する。
- ・ 「幸」は自分の親に対してだけでなく、先祖・民族・宇宙にまで繋がっていくものである。



《人間学塾・中之島》

■平成元年12月カリキュラム

＊日時 12月14日(第2土曜)

午後1時～5時

＊場所 大阪大学中之島センター(10F)

＊講師 上甲 晃先生(志ネットワーク代表)

「国家百年の計」

1965年大阪市に生まれる。1985年松下電器産業(株)に入社。1987年財団法人松下政経塾に出向。理事・塾頭を歴任。1996退社し志ネットワークを設立。1997年『青年塾』を創設。現在第23期生を迎え、累計約200名を超える。主な著書『志のみ持参』『人間として一流をめざす』『志を教える』『志を継ぐ』『人生に無駄な経験などひとつもない』など著書多数。

《お薦め書籍》

『幸せになるヒント』

柴田久美子 著



出版社 ミネルヴァ書房
頒価 一・一〇〇円税込
ISBN-13 978-4-623087570

人は老いてこそ美しく、日常を感謝の心にかえる力がある。著者の出会いへの感謝が込められた100編の日記。
人生の最期に死を願う言葉を口にする高齢者に家族への切ない思いをみつけ、ふとした会話に相手の人生や人柄、救いや諦めの境地を見出す。「死は怖いものでも、忌み嫌うものでも、敗北でもありません」と言い、看取りの現場に価値を見出す著者。看取り士会創設の原点となる日々をていねいに描いています。

《芳信抄》

鍵山秀三郎先生(東京都目黒区)

目先のことに目を奪われて右往左往する人が多い中でありまして、真摯な姿勢で学ぶ方がいらつしやいまして嬉しゅうございます。

山下武彦様(埼玉県児玉郡)

私の入塾動機・テーマ等には、ピンと張りつめた決意がうかがわれました。

島崎藤村の「人に三智あり」Ⅱ「学んで得る智」「人と交わって得る智」「自らの体験によって得る智」これが正に人間学塾であるとの角高さんの言葉に感銘を受けました。すぐれた先人に学び、自らの生き方を高めようとする方々の営みを素晴らしく思いました。

中島和之様(鹿児島県日置市)

みなさん凄いなあと 생각합니다。えっこの人いるの？と驚きの面々でした。

大きくは細川三郎様の思い、もう一つは塾生の皆さまの思いでした。総じて続ける人達は凄いなあ!!が私の感想です。

加藤秀夫様(宮城県名取市)

顧問細川三郎様の「十周年に向けて・・・」のお言葉を大変力強く展望を述べられ励まされました。

入塾動機等を拝読いたし、お見知りの方も散見して嬉しく存じました。

大出雅一様(埼玉県川越市)

大勢の塾生の方が人生の指針の学びをされたことが解ります。今後とも益々塾の重要性は増してくると思います。塾生お一人おひとりの熱意が伝わってまいりました。

桂 誠司様(愛媛県四国中央市)

新しいスタート良いですね。皆さまの一言が素晴らしいです。

台風19号に追い打ちの大雨、自然の力がだんだん大きく恐ろしくなりますね。

坂部智一様(愛知県豊田市)

知る人ぞ知る会が実感といえますか、ご縁がないと気づかないで、ご縁にならないと思っておりました。師の元に集まって学ばせて頂けたのは、奇跡のような、ありがたい時間だったと改めて思います。

柴田久美子様(岡山市)

皆さまの笑顔とお言葉に励まされます。

先日鍵山先生にお目にかかりました。愛国心の強さを情熱を込めて語ってくださいました。「どうぞ新刊をお書きください」とご提案させて頂きました。

《淀川掃除に学ぶ会》

短信 志村隆夫

11月3日朝から晴天に恵まれてお掃除日和となりました。

参加された方は25人、集めたゴミ袋は11個でした。いつもの通りよしや様からお茶・お水の差し入れを頂きました。

また、生駒市のスマイルホームの松山社長さんが、お握り・コーヒー・熱いお茶などを用意してくださいました。

いま掃除をしている場所は、ゴミが少なく綺麗なので元の場所に戻ろうかという意見があり検討しています。来月からは始まる時間が9時からになります。河川敷に入る鉄扉の開く時間が一時間遅くなります。参加ご希望の方はご遠慮無くお問い合わせください。

